

ドゴール「トランジスターの勝利」 —1961年アルジェリア「将軍たちの反乱」—

三石 善吉*

De Gaulle's 'victoire du transistor' of 1961 against Generals' Putsch

Zenkichi MITSUISHI *

Abstract

The Algerian war (1954–62) was a grim, brutal war between the French Fourth-Fifth Republic and the Algerian National Liberation Front (FLN). The Generals' Putsch took place from 21 April to 26 April 1961 at the final stage of the Algerian war. The military coup members, believed in 'Algérie Française' and strongly backed up by the European colonists, were quickly broken by 'one simple, depressingly clever move' [F. Forsyth, "The Day of the Jackal"] of de Gaulle, utilizing the transistor-radio and passive resistance. Finally the war led to Algeria achieving its independence from France on July 3, 1962.

Key words: generals' putsch, de Gaulle, victoire du transistor, FLN, passive resistance.

1. ドゴール大統領登場までのアルジェリア簡史—一八三〇～一九五八

1. 1 仏領アルジェリアにおける統治：

フランスによるアルジェリアの植民地化は、ブルボン復古王制〔一八一五～三〇〕の最末期、国内矛盾〔穀物収穫減・物価騰貴〕を対外出兵〔一八三〇年七月アルジェ占領〕で隠蔽しようとする政策として始まり、続くルイ・フィリップの七月王制〔一八三〇～四八〕は、アルジェリアの全土征服を目指し、かつメキシコ〔一八三八〕、清朝〔一八四四〕、阮朝〔一八四七〕に対する「帝国

主義的」政策を強行した。第二共和制〔一八四八～五二〕は、一八四八年「アルジェリアはフランスの領土の不可分な一部である」と宣言して、入植・同化政策を強行するが、第二帝制期〔一八五二～七〇〕では、ナポレオン三世は逆に「アラブ王国」政策〔連帯・協力政策〕を打ち出し「入植推進派」の怒りを買うことになった。第三共和制〔一八七〇～一九四〇〕に至って入植・同化政策が復活し、アルジェリアを本国の新しい州にせんとするも、「征服者と被征服者の根本的な差別」は拡大し、問題はそのまま第四共和制〔一九四六～五八〕に持ち越された¹⁾。

* 筑波学院大学名誉教授、Tsukuba Gakuin University

フランスによるアルジェリアの統治は、一八四八年以降一九〇〇年時点で、①ヨーロッパ系植民者が多数を占める北部三県〔アルジェ、オラン、コンスタンティヌ〕等の「完全自治市町村」は二六一あり、市議会が設置され、市長による地方自治が認められていた。②少数の植民者と多数のムスリムの混在する「混合市町村」の内、軍服を着た行政官の統治する民政地区には七三の、将校の統治する軍政地区には六の市町村があった。③南部地域の「原住民市町村」は一二あり、軍政地域とされ、原住民問題局の将校が統治した²⁾。

「フランスのアルジェリア支配がチュニジア、モロッコ〔両国一九五六年三月独立〕における支配と異なる点は、現地社会の伝統的な経済・文化・政治構造がフランスの介入によって徹底的に破壊されたことにある。…特権階級を除く大部分のムスリムは、アルジェリア総督府の統治のもと、伝統的なアラビア語教育の機会を奪われ、フランス語の教育も十分に与えられないまま、非識字の状態」に置かれていたことである〔私市、九二頁〕。

第二次大戦直前では、総農業人口の二％に当たるコロン〔colon入植者〕が、全農業用地の二七％を所有し、「原住民農民は、その大部分が土地なしの状態」か、あるいは「家族を養うに事欠くような狭い土地しか所有していなかった」。原住民農民たちは、とくに植民地化の進んだアルジェやオラン周辺では、コロンのための農業労働者となったり、東部のムスリム地域では、ムスリム地主の小作人となって五分の一税を納めるか、炭鉱や工事現場で働く労働者か、フランス本土への出稼ぎ労働者になるかであった〔ベルヴィエ二〇頁〕。

「ヨーロッパ人入植者たち」は、一九四四年には百万人を数えたが、フランス本国からの移民よりもスペイン、イタリア、マルタ、スイス、ドイツからの移民でフランスに帰化した人たちの方が多かった。これらヨーロッパ系のアルジェリア人は全人口の一〇％弱を

占め、その八〇％がオラン、アルジェ、アンナーバ、スキークダといった大都市、および肥沃なアルジェリア西部に大地主として居住していた〔ベルヴィエ八～九頁〕。

他方「アルジェリア人ムスリム」は、「ムスリム原住民」とも呼ばれ一九六二年時点で一千万人を数えた〔ベルヴィエ二四頁〕。彼らは「フランス国籍」を有してはいるが、フランス民法に服する「フランス市民」ではなかった。彼らはイスラーム信仰＝イスラーム法を放棄しないかぎり「フランス市民」にはなれなかった。市民権を持たないと義務教育等々の恩恵を受けることができなかった〔ベルヴィエ二一頁〕。しかし棄教すれば「出身環境に対する裏切り」者と見なされるために、市民権を要求する者はまれであったし、加えて「原住民出身のフランス市民」は「帰化人」と呼ばれて公然たる差別を受け、一九六二年時点で一万人を超えなかった〔ベルヴィエ二三頁〕。

1. 2 アルジェリアにおける民族意識の覚醒

アルジェリア人ムスリムが、民族意識に目覚めていくのは、第一次世界大戦中のことである。その先駆者アミール・ハーリド〔一八七五～一九三六〕は、フランスで高等教育を受け、大戦中にウイルソン大統領にアルジェリア人の実情を訴えたり、「青年アルジェリア人」運動を興して植民地体制を批判し、一九二四年には「真のナショナリズム運動の最初のもの」とされる「北アフリカの星」党を結成する。この運動は、ハーリドの高弟メサーリー・ハーツジュ〔一八九八～一九七四〕に受け継がれ、労働者による組織的で急進的、かつ初めてアルジェリアの独立を宣言したが、一九二九年に禁止令が出された。また一九三一年、イブン・バーディース〔一八九九～一九四〇〕の指導下に「アルジェリア・ウラマー（宗教知識人）協会」の「イスラームはわが宗教、アラビア語はわが言語、アルジェリアはわが祖国」を標語として、「宗教的・文化的・社会的」な

啓蒙運動が展開されて大きな影響を与えた。一九三六年にアルジェで開催された「第一回ムスリム会議」は、「フランスへの単純明快な併合」憲章を採択し、「北アフリカの星」の独立の主張は退けられた。他方フランス政府は、一九三七年急進派ナショナリストを厳しく弾圧し、「北アフリカの星」は解散させられた。その刷新者メサーリーは一九三七年「アルジェリア人民党 PPA」を結成するものの、同年十一月には逮捕投獄され、一九三九年には PPA は解散させられ、非合法活動に転じる³⁾。

1. 3 フランス第四共和国とアルジェリア独立運動の始まり

アルジェリア戦争は、第四共和制と第五共和制に関わる。短命で左派系の優越する第四共和の歴代内閣は、いずれも常にアルジェリアの特権的支配的階級であるヨーロッパ系移民および在アルジェリア・フランス軍の「フランスのアルジェリア神話」に左袒して、独立派に対する強硬弾圧策を採ってきた。かくして第四共和国は、軍の厳しい弾圧、それに対する独立派の残酷な報復という悪循環を脱出できないでいた⁴⁾。

大戦中の一九四三年四月から居住地拘束を受けていたメサーリー・ハーτζジュは、戦後の一九四六年一月、フランス政府からアルジェリアに帰国して合法新政党「民主的自由の勝利のための運動 MTLD」を創設することを許可された。PPA・MTLD の選挙参加への方針転換はその内部の混乱を招くが、直ちに地下秘密軍事組織＝「特別組織 os」が作られ、合法・非合法の両面作戦がとられた。MTLD は、一九四七年一〇月の市議会選挙で大勝した。第四共和制政府は、PPA・MTLD の躍進を恐れ、候補者を逮捕するなどの選挙妨害を徹底した。以後 MTLD は活動を地下秘密軍事組織＜os＞に切り替えるが、資金・武器の不足、そして一九五〇年には＜OS＞の存在

が警察に露見して解体されてしまう〔ベルヴィエ五〇～五一頁〕。

一九五三年一二月、MTLD の中央委員会は、運動を国家全体に拡大・統合すべく、アルジェリア全国会議への参加をアルジェリア社会の最上層にまで呼びかけた。一九五二年以来フランスに居住地拘束を受けていたメサーリーは〔正確な状況把握ができず〕これを革命路線の放棄とみて非難し、MTLD はここにメサーリー派〔少数派となる〕と中央委員会派に分裂する。一九五四年五月、＜OS の元メンバー＞は中央委員会派と合同して「統一と行動のための革命委員会 CRUA」を結成し、蜂起を早めるべく「九人の合同指導部」を創設し〔アージュロン二八頁。ホーン六頁〕、二種類のピラを用意した。ベルヴィエによれば、「第一に、民族解放戦線 FLN の創設を告げ、アルジェリア大衆に戦争の大義と目的を、フランス政府に和平の条件を知らせる文章。第二に、アルジェリア人の一人一人が立ち上がり、独立戦争の闘士たちを支持することを求める＜民族解放軍 ALN＞の呼び掛け。一九五四年一〇月三一日から十一月一日にかけての夜、乏しい軍備しか持たない数百人のほどの兵士たちの手で、民族解放戦争の口火が切られた〔ベルヴィエ五五頁〕」。すなわち十一月一日、深夜午前零時から三時の間に、バトナ、ヘンシュラ、アルジェ、オランなど全三〇カ所で同時に「アルジェリア民族解放戦線 FLN」の武装蜂起が起された。アルジェリア独立戦争の始まりである〔私市一九頁〕。

アルジェリア戦争は、まずアルジェリア・フランス政府の「緊急事態法（一九五五・四・三）」のもと、アルジェリア全土におよぶ「指令」、すなわち「武器を使用したか、武器の所有が認められるか、または暴力行為を行おうとしたすべての叛徒は、その場で殺害されなければならない」との苛酷な「指令」に対抗して、FLN-ALN 側は「フランス民間人の無差別殺害」という「捨て身の戦略」を選んだ。こう

して一九五五年八月、ヨーロッパ系民間人と裏切り者と見なされたムスリムの殺害、及びこれに対する軍と民兵の復讐行為によって、公式統計で一二七三人の、FLN側の統計では一万二千人の死者がでた。こうして「アルジェリアの反乱は、後戻りできないものとなった」〔ベルヴィエ六〇～六二頁〕。

ここでは、これ以降の政府による苛烈な弾圧、これに対するALN側の「ヨーロッパ人住民に対する<恐ろしい報復>」〔ベルヴィエ六九頁〕を伴う、アルジェリア戦争の凄惨な歴史的展開を追うことはできない。ただ言い得ることは、ドゴールの見たところアルジェリア問題の本質は、「第四共和制は、形式的には合法であるが、合法政府と反乱勢力という形で国民の分裂を招いた元凶」であって、「アルジェリアの反乱自体が第四共和制が国民的統一に失敗したことの表れ」であると言うことである〔塚本(2)六頁〕。

確かにルネ・コティ〔在任一九五四・一・一六～一九五八・一・八〕を大統領に頂く第四共和制末期のピエール・フリムラン〔在任一九五八・五・一三～六〇・一〕内閣の状況は、「国防大臣、軍は服従しない。内務大臣、警察を掌握していない。航空大臣、空軍機をコントロールできない。アルジェリア大臣、アルジェリアに足を踏み入れることができない。サハラ大臣、サハラに行くことができない。情報大臣、検閲しかできることはない」〔塚本(1)三四頁〕。つまり第四共和国の政治体制と「昔ながらの同化政策」とでは、アルジェリア問題を解決できないことが判明したのである。かくて一九五八年五月二九日、コティ大統領は議会に教書を送り、「最も名声の高いフランス人」の首相就任に賛成してくれなければ私は大統領を降り、と議会に選択を迫った。フリムラン首相も「今こそドゴールに助けを求めなければならない」と辞意を表明した〔塚本(1)三五、三七頁〕。

2. 第五共和制—ドゴールの登場

2.1 クーデター計画の進行、ドゴールの大戦略

ドゴール〔一八九〇～一九七〇〕将軍は二つの陣営、一つは「<フランスのアルジェリア>の救済を願うアルジェリアの市民と軍部」によって、もう一つは「危機に瀕した共和国の救済を願う上下院と本国の世論の大多数」とによって、「権力の座に復帰するよう懇願されて」、まず第四共和国の最後の首相〔在任一九五八・六・一～五九・一・八〕の座に就く。ドゴールは、まずは「権力を固めるために〔新憲法制定までの〕時間を稼ぎ、段階的に彼の意図を明らかに」するといった「曖昧殿下」として登場する〔ベルヴィエ八七頁。ホーン三九〇頁以下〕。

新しい憲法は、「ドゴール将軍の身長〔一九六cm〕に合わせて仕立てられた憲法」であって、一九五八年六月三日から作業に取り掛かり同年九月二八日の国民投票で、八〇%の賛成で成立する〔一七日の短期間で制定された〕。大統領に「高い！」権力を与え、議会の立法権が縮小され、「大統領制的、議員与党多数派的、合理主義的な要素が権力の一元化を目指すという、アメリカ型とイギリス型と西ドイツ型がすべて重なり合ったような、民主的世界でもユニークな体制〔政治学では「半大統領制」という〕がここに出現した⁵⁾。

ドゴールは一九五九年一月八日、新しい第五共和制〔一九五八年一〇月四日～現在〕の大統領に就任する⁶⁾。首相にはミッシェル・ドブレが就任する。ドゴールはアルジェリア視察後、一九五九年九月一六日夜、テレビ・ラジオでアルジェリア人の民族自決の三つの選択肢を示した。第一の「悪魔」的選択肢は、分離すなわち独立、第二の選択肢は、フランス化するなわちフランスへの統合であり、第三の選択肢は、フランスとの連合による自治すなわちフランスの援助に支えられフランスと緊密な同盟関係を持ったアルジェリア人による

アルジェリア人の政府、である。これに対してアルジェリア共和国臨時政府 GPRA (FLNの政府組織)は、九月二八日に「停戦条件および自決の方法についての交渉に入る用意がある」と発表した。しかしアルジェリアのコロンにとっては、ドゴールに裏切られたという思いが強く、軍部の将校たちも同じ思いであった〔アージュロン一四二頁。ベルヴィエー〇四～一〇六頁〕。

ドゴールは、アルジェリアを訪問視察して、一九六〇年六月一四日、アルジェリアの民族主義者のリーダーたちに「フランスと結びついたアルジェリア人のアルジェリア〔上記の第三の道である〕」を選択するであろうと演説したが、GPRAは、完全自決を主張する。しかしドゴールは、同年一月四日の演説で同じ第三選択肢を繰り返した〔アージュロン一四四頁。ベルヴィエー一二頁〕。同年一二月九日から一三日にかけて、ドゴールは最後のアルジェリア訪問を行った。軍〔エドモン・ジュオー将軍による「フランスのアルジェリア戦線」〕は、ゼネストを呼びかけ、反乱を起こしドゴールの暗殺を準備した。他方軍のこの動きに対抗して一二月一日、「アルジェリア人のアルジェリア」を支持するムスリムの若者たちのデモが、オラン、アルジェで大規模なデモとなり暴動へと発展し一〇人の死者が出た〔ベルヴィエー一六頁〕。

一九六一年一月八日、ドゴールのアルジェリア政策の是非を問う国民投票が行われ、本国では投票率七六・五％、賛成七六・二五％、アルジェリアではFLNの棄権作戦で棄権した者は登録有権者の四二％に及んだが、賛成票は三九％、反対票は一八％(コロン有権者の割合に略同じ)であり、最終的にはドゴールは「平和実現のための白紙委任状を受けた」ことになった。この投票結果を読んだドゴールは、「曖昧殿下」の仮面を密かに脱ぎ捨てた。すでに一九五九年九月一六日に示した、アルジェリア人の三つの選択肢のうち、第一の「悪魔」的選択肢(分離すなわち独立)

を取るしかないと思い定めたのである。

フレデリック・フォーサイス〔一九三八～〕『ジャッカルの日』に見られる「陰謀の解剖学 Anatomy of a plot」によれば、一九六一年二月下旬ころであろうか、ドゴールは、アルジェリア駐在の徴集兵たちに「娯楽用」として「数千台」のトランジスター・ラジオを支給した。「ラジオは兵士たちによって無害な慰めだというわけで、将校や上級下士官の多くはむしろ喜んでその支給を認めた」⁷⁾。この新しい流行し始めたばかりの「情報伝達機器」の恐るべき二面性について、ドゴール以外の誰もが、想像すら出来なかった〔後述〕。

その二週間後の三月一五日、アルジェリアの独立を視野に収めたFLNとの交渉開始が決定された〔ベルヴィエー一七～一九頁〕。一九六一年四月七日のエヴィアン〔エヴィアン＝レ＝バン、仏のレマン湖畔の港町。ミネラルウォーターで著名〕交渉が延期になったあと、同年四月一日ドゴールは記者会見で「脱植民地化は我々の政策であるという発言を行った。このことが“フランスのアルジェリア”の支持者たちの反乱を急がせた」〔ベルヴィエー二〇頁〕。

アルジェリアでは、軍・民の活動家たちが交渉開始を阻止すべく結集しようとしていた。マドリードでは、ピエール・ラガイヤルド〔一九三一～二〇〇四〕らが一九六一年二月「秘密武装組織 OAS」を創設していた。本国フランスでは、一九六一年四月二日、ドゴールのアルジェリア独立の演説を聴いた翌日、権威ある将軍としてモーリス・シャル〔一九〇五～七九〕大将が、長い躊躇逡巡の後に、ついにアルジェリアにおける軍事クーデタの指揮者となることを決意する。シャル将軍の決断で「Dデーは、四月二〇日とされた一わずか八日を残すのみ」である〔ホーン四六六～四六九頁〕。現地アルジェではエドモン・ジュオー〔一九〇五～九五〕大将が参加し、アンドレ・ゼレール〔一八九八～一九七九〕大将と、遅れてラウル・サラン〔一八九九～一九八四〕大将が加わることに

なった⁸⁾。こうして「四人の将軍たち」の陣容が整った。

2. 2 将軍たちの反乱

一九六一年四月二一～二二日、アルジェ。二一日金曜日の夜遅く〔蜂起は一日延ばされた。ホーン四七四頁〕、第一外人空挺連隊〔二〇〇人、ホーン四八六頁〕は、エリー・ドノワ・ド・サン＝マルク〔一九二二～二〇一三〕少佐の命令下、基地ゼラルダから三〇 km 離れたアルジェ目指して車列を組んで進軍中〔N五号〕に、アルジェの郊外で、不穏の空気を察して視察に来たアルジェリア軍総司令官フェルナン・ガンビエ〔一九〇三～八九〕将軍の公用車と遭遇する。将軍は大胆にも公用車で車列を遮ろうとするが、車は側溝に放り込まれ、将軍は逮捕された。ドゴール政府の閣僚ロバール・ビュロン〔一九一〇～七三〕公共事業相は、ホテルで寝込みを襲われて逮捕された。ジャン・モラン〔一九一六～二〇〇八〕政府全権委任代表は二一日の夕刻ドゴール支持の将軍から「何か起こるようです」との警告を受けており、パリ内務省〔のロジェ・フレイ（一九一三～九七）内相〕に状況を通報していたが、ビュロンよりも先にすでに逮捕されてしまった〔ホーン四七四頁〕。

四月二一～二二日、パリ。二一日の夜、ドゴールは新任のアルジェリア担当問題相ルイ・ジョクス〔一九〇一～九一〕と国賓のセネガル大統領サンゴール〔一九〇六～二〇〇一〕とともに、コメディイ・フランセーズフランス国立劇場でラシーヌ〔一六三九～九九、仏古典時代の悲劇作家〕の「ブリタニキウス（一六六九）」を観劇した。「将軍が床についてだいぶたつてから、ジョクスは一揆の第一報を聞き、厳格な規定にそむいてエリゼ宮に電話し、ドゴールを起こした」。ジョクスは深夜ドゴールと会見し、直ちにアルジェリアに向かった⁹⁾〔ホーン四八〇頁。ワース二〇九頁〕。

四月二一～二二日、パリ。二一日夜間から二二日にかけて、「約千八百人の軽装備の落下傘兵がオルレアンの森で、別の四百人がラ

ンブイエの森で、待機していた。両部隊はランブイエからの戦車隊と合流し、三個連隊でパリに侵入して、エリゼ宮その他行政上の主要地点を占拠する手はずになっていた¹⁰⁾。このクーデタ計画は、まずアルジェリア全土を軍事的に制圧し、ドゴール大統領を暗殺してパリに軍事政府を樹立することであった¹¹⁾。

ワースが「次の日〔四月二二日、土曜日〕、フランス国内では思い切った措置がとられはじめた。軍の〈疑わしい〉人物は逮捕され…」〔二〇九頁〕と指摘し、ペルヴィエが「〈パリの陰謀〉も四月二二日に発覚してしまった」〔二〇九頁〕と言うのは、ホールの言う「内務相ロジェ・フレイは迅速果敢に行動し、冒険家のジャック・フォール〔一九〇四～八八〕将軍その他の陰謀加担者を現行犯で一網打尽にし、首都進撃の企てを芽のうちに摘み取った」〔四八〇頁〕という事実を指そう。四月二一日から二二日の早朝にかけてのことである。

四月二二日（土曜日）、アルジェ。早朝三時までには、反乱軍はアルジェの主要な公共建物全部を占領した〔ワース二〇九頁。ホーン四七四頁〕。「二二日の夜明け、レ・タガランの本部〔アルジェ大学の北方近傍〕にいたシャルは、それまでの事の運びにまずは満足していた。アルジェの主要中心地点はすべて安全にかれの支配下に入っていた。モラン〔アルジェリア軍総司令官〕とガンビエ〔仏政府全権委任代表〕とその主な部下は監禁されていた」〔ホーン四七六頁〕。

この日、アルジェ、朝七時。ゼレール将軍は「ラジオ・アルジェ」から放送し、最高司令部は戒厳令を布告し、「フランスのアルジェリア」以外に平和的解決の道はあり得ないと述べた。「軍はアルジェリアとサハラを管理下に置いた。…フランスのアルジェリアは死んではいない。…独立アルジェリアはなく、将来も決してないであろう。フランスのアルジェリア万歳！フランス万歳！」〔ワース二〇九頁。ホーン四七六頁（文体を改めた）〕。

この日、四月二二日、パリ。夕刻までに、「フォールが逮捕されて指導者なしになってしまうと、何の命令も行きわたらなくなり、結局憲兵の一分遣隊が森にやってきて、そっけなく解散を命ずると、精強の落下傘部隊は羊のようにその命令に従ってしまったのである」〔ホーン四八〇頁〕。こうしてパリにおけるクーデタの危機は切り抜けることが出来たが、しかしこの日、アルジェの反乱は、「拡大して、二、三人の将軍と数多くの佐官達が参加、コンスタンチヌヌやオランにも広がるように見えた」〔ワース二〇九頁〕。

「パリのフランス政府は苦しい状況に追い込まれた。五〇万のフランス軍がアルジェリアに置かれており、フランス本国にはごく少数の即応部隊が残されているだけである。ドイツに配置されている二ヶ師団は信頼性に疑いがあった。準軍事的な〈国家憲兵隊〉と〈共和国保安中隊〉は同様に忠誠心が疑わしかった。しかもパリ政府に対する並行クーデタが起こされるかもしれない、あるいは空軍が反乱軍を輸送してフランスに侵入しドゴール政府を乗っ取るとの恐れもあった。アルジェにおけるクーデタの成功は、一にパリの合法政府を倒すことができるか否かに係っていた」¹²⁾。

この日、アルジェ、夜七時一五分。シャル将軍はラジオ放送を通じて宣言した。「私はアルジェにいる。ゼラー、ジュオー両将軍およびサラン将軍との連携のもと、我らの戦死者の死を無にしないために、軍はアルジェリアを保持するとの我々の厳粛な誓いを遵守する。自暴自棄となった政府は…今日にも、叛旗を翻した外部組織(FLN等)にアルジェリアを引渡そうとしている。…皆さんは、明日にもメルス・エル＝ケビールやアルジェがソヴィエトの基地となることを望むだろうか。…軍はその使命完遂を怠ることなく、皆さんに約束した指令以外に、他のいかなる目的も持っていない」〔ホーン四七六頁。TLOA四・二二〕。

四月二三日（日曜日）、パリ。第二次大戦当時の古ぼけたシャーマン戦車¹³⁾が国会議事堂や政府庁舎に布陣したが、故障する戦車もあり、「アルジェリア派遣軍の近代装備」と比べると、「もしシャルの落下傘部隊」がフランス本土に降下したら、「止める手だて」がないことは明らかだった。パリでは、航空機の運航は全て停止された。バスや列車も運転を中止した。映画館も閉鎖された。「カフェだけは営業をつづけていて、危機の最新の状況を議論し合うパリジャンで込みあっていた」〔以上ホーン四八一頁〕。この日、フランスの諸政党と労働組合は大衆集会を開き、二四日月曜日には抵抗の一時間ゼネストを行うと声明した¹⁴⁾。

この日、アルジェ。朝までに、シャル将軍が一揆に参加する部隊を数えてみると、「情けないことに完全に頼りにできるのはアルジェとその周辺地域の部隊だけであることが明らかになった」。昼近くなって、マドリードから四人の将軍の最後の一人、ラウル・サラン将軍がアルジェに到着した。サランを空港まで送ってきたスペインの元外相セラノ・スニエル(一九〇一～二〇〇三)は、別れ際に「ことは敗れましたな。アルジェの将軍たちは元気がない。モランもガンビエも殺していない。フランコ(将軍一八九二～一九七五)ならこんな躊躇は見せなかったでしょうな」〔以上ホーン四七八頁〕。この不吉な予言は、この日の夜八時、ドゴールのテレビ演説の巨大な影響力で的中することになる。

2.3 ドゴールの演説―「大転換点」

この日、四月二三日（日曜日）、夜八時、全アルジェリア・全フランス。人々はドゴール大統領の演説を聞こうとテレビあるいはトランジスターに、かじりついた。「INA-Jalons-Message radiotélévisé du général de Gaulle du 23 avril 1961」〔これで検索可〕は、ドゴールの演説の全文を乗せ、かつ簡要な解説を付

しており、この解題によれば、このドゴールの演説は一九六一年四月二三日二〇時に行われたこと、演説時間は六分一七秒〔一〇・五ポイントのセンチリー一体でA四版一枚に収まる簡潔な演説である〕であったこと、フランス本国からアルジェリアへの電波の中継基地は、一つは「ラジオ・アルジェ」〔一揆の手に渡ったが、彼らは本国からの電波の遮断に思いも至らなかった(ホーン四八三頁)〕と、もう一つは「ラジオ・モンテカルロ」〔モナコ公国〕があり、後者はフランス本国の電波を、公認のもと、昼夜を分かたず地中海を超えてアルジェリアへと、中継を行っていた。この電波の中継によって、《victoire du transistor トランジスターの勝利》が可能になった。以下、ドゴールの演説の摘要である〔ホーン四八〇頁も参照〕。すなわち、

アルジェリアにおける軍事クーデタによって、反乱権力は、その地歩を固めつつある。…この権力は、外見上は四人の退役将軍であるが、実質上は党派心に固まり、野心的で狂信的な将校の一团である。この一团とこの四人組は、限界ある・付け刃のノーハウしか持っていないのに、彼らの熱狂 *frénésie* で、我が国家と世界を変えると考え思い込んでおり、彼らの暴挙 *entreprise* は、必ずや国難へと至るであろう。…

国家は愚弄され、国民は無視され、我が国力は低下し、我が国家の国際的威信は失われ、我が国家のアフリカにおける地位と役割は傷つけられた。これは誰のせいなのだ。何と (*Hélas* エラス)！何と！何と！その義務と名誉と存在意義とが、奉仕し服従することにある、この連中 *des hommes* によるものだ。…

フランスの名において私は命令する。あらゆる手段を尽くして *tous les moyens*、私は言う、あらゆる手段を尽くして、彼らを最終的に除去するまで、これらの連中

を食い止めよ。…私は全フランス人に、特に兵士諸君に、彼らの命令を、警え一つであろうとも遂行する事を禁ずる。…祖国に不幸が立ちこめる前に、共和国に脅威がのしかかる前に、正式に、憲法評議会、内閣総理大臣、元老院議長、国民議会議長からの助言を受け、私は、我が国憲法の第一六条〔非常事態権限〕を行使する事を決断した。今日から私はこの状況に際し必要であろう全ての手段を行使する。…

Françaises, Français, aidez-moi ! (フランスーズ, フランセ〔フランス人の男女よ〕, 我に助力を！)

その三時間後、ドブレ首相は独自に放送して、空挺部隊の攻撃に備えてパリ空港を閉鎖すると通告した。ドブレ首相は「あらゆる手段」を強調した（これは明らかに軍事行動を含む）が、首相は非暴力的手段を取るべきと確信していた。首相は、もし航空機で兵士たちが到着したら、大衆的行動で説得して、合法政府に忠誠をつくすようにさせよと命じ、「サイレンの合図が鳴ったら直ちに、徒歩あるいは車で飛行場に赴き、道を踏み外した兵士たちに大きな誤りであることを悟らせるように説得せよ」と命じた〔シャープ二〇一六、二五頁〕。

さて、このドゴール演説の核心は、「全てのフランス人」に、「とりわけ全兵士」に「あらゆる手段」を尽くして、クーデター味に協力するな、命令を実行するなど命ずるものである。ワースは、次のように指摘している。「のちに言われたところでは、この放送でドゴールは〈トランジスターの勝利〉と呼ばれるものをアルジェリアに生み出した」。アルジェリア駐留の「数十万のフランス徴集兵はトランジスター・ラジオでこの放送をきき、その影響は絶大なものがあつた。彼らは〈四人組〉に反抗する覚悟を決めた。無数の将校が冒険に乗り出すのに反対する覚悟を決め

た。「二三日が大転換点となった」[以上ワース二一〇頁]。

ドゴールのフランスからの放送を、アルジェリアの一般大衆も、多くが徴集兵士であった軍隊の面々も、トランジスター・ラジオ経由で傍受し、その演説が複写されて、広く配布された。ドゴールは、自分の演説が広範囲にわたる非協力と不服従を引き起こすものと確信しており、「今から直ちに、反乱は、一時間毎にますます激しくなっていく受動的抵抗に直面しよう」と述べた[シャープ二〇一六、二五～二六頁]。カリスマ・ドゴールの予言は、現地アルジェリアの各地で、各官庁で、各部隊で、急速に決定的に、実現されていくのである。

四月二四日（月曜日）、アルジェリア、この日の朝、アルジェのシャル元空軍大將は、「一揆軍の本土進攻」が「物理的に不可能になった」ことを知った。彼の信頼するジャン＝ルイ・ニコ[一九一～二〇〇四]将軍の率いる空軍が離反し始めたのである。一揆開始時には大型の軍用輸送機ノラトラ[Nord Noratlas ノール・ノラトラ、搭乗九九人と貨物]四五機と二個連隊の各種の輸送機[四八機×二連隊＝九六機程か]があったのに、次々とフランスへ脱出してしまったのである。さらに「地上部隊も次々と[蜂起の]指示を撤回していき」、頼りにしていたコンスタンチヌス地区では蜂起への参加が「本心からの服従ではない」ことが明らかとなった。オラン県ではさらに状況は悪く、同県での権力を掌握すべく精鋭の空挺二個連隊が配置されていたのであるが、同部隊はこの進撃命令を拒否し、シャル将軍を「落胆させて」しまうのである[ホーン四八三頁]。さらにまた、海軍はすでに二二日の時点から中立を厳守し、どちらの側にも加担しなかった[ホーン四七七頁]。

四月二四日（月曜日）、パリ。ドゴールは、憲法に規定する大統領令[第一六条、非常事態権限]に基づいて緊急権力を発動し、多数の右翼

のクーデタ支持者たちを逮捕した。空港では、人々が自動車を滑走路に放置して、航空機が着陸しようとしても出来ないように妨害の準備を整えた。官公庁のビルには警戒に当たる者が配置された。アルジェリアには金融封鎖と船積み封鎖が敷かれた。午後五時、一千万の労働者が、象徴的な一時間ゼネストに参加した。この日の夜ジュアン・クレパン[一九〇八～九六]将軍は、ドイツ駐留のフランス軍は政府に忠誠をつくすと声明し、翌朝パリに移動してクーデタに備えるよう命じられた[以上シャープ二〇一六、二六頁。スワースモア]。

四月二五日（火曜日）、アルジェリア。アルジェリアのフランス軍は、ドゴール正統政府を支持して、反乱軍を弱体化させるよう行動した。すなわち火曜日までには、アルジェリアには兵員輸送用の飛行機は、移動野外病院機に至るまで、一機もなくなっていた[ホーン四八三頁]。多くの戦闘機がアルジェリアから離れ、反乱軍がフランス本土に侵入出来ないようにしてしまった。残ったパイロットたちは、機関の故障のふりをしたり、飛行場を封鎖したりした。多くの兵士たちは自分たちの兵舎にしっかり閉じこもったままだった。そのほか意図的な非能率行動の多くの事例が見られた。例えば、反乱軍の将校からの命令書は紛失した。情報書類は消失した。通信と輸送は遅延した。徴集兵たちは皆自分たちの非協力運動の力が合法政府を助けるとわかっていてそうしたのである。アルジェリアのフランス人市民たちも、アルジェ市の警察官も、クーデタ側を支持していた。しかしアルジェ市の公務員や地方政府の責任者たちは、しばしば反抗を企て、公文書を隠してしまったり、クーデタ側を支持していると見られないよう個人的に辞職したりした[シャープ二〇一六、二六頁]。

四月二五日（火曜日）、サハラ砂漠・レツガース。ワース『ドゴール』によれば、フランス最初の原子爆弾[青のトビネズミ Gerboise

Bleue)は一九六〇年(二月三日)にサハラ砂漠で爆発されたが、サハラ基地レグァヌにはもう一個原子爆弾があった。ドゴールは、反乱の将軍たちがそれを押えようとした場合には、すぐに爆発させるように命じた(二一〇頁)。フランスの技術者たちはレグァヌにおいて、計画に無かった核爆弾の実験を行った。「ジェルボワーズ・ヴェルト(緑のトビネズミ)・プルトニウム分裂爆弾」は、シャル将軍ら反乱者が支配下に置く恐れがあったので、それを妨げるべく、急ぎ爆発させたのである。その核弾頭爆発威力は五キロトンで、意図的に爆発されたものである(TLOA)。それから大気圏中の核実験は、他のアフリカ諸国からの厳しい非難を受けたので、それ以後アルジェリアでの核実験は、アアガー国立公園の北、南アルジェリアのオガル山地のイン・エッケルでの地下実験¹⁵⁾に移された。

四月二五日(火曜日)、朝、シャル将軍は「事はすべて敗れた」との結論を下していたが、それでもその日の終わるまで反乱の闘いを継続した。シャル将軍は自分一人だけで降服すると決めていた(ホーン四八四頁)。この日の夕刻、アルジェ市の警察官は、ドゴール政府支持に回った。この日の夜、ドゴールはさらに放送を通じて、政府に忠誠を尽くす軍隊に、反乱軍への発砲を命令した。しかしながら、その必要はなかった。クーデターはすでに致命的に弱体化していたからである(シャープ二〇一六、二七頁)。この日の「真夜中に、シャルと三人の反乱指導者は(アルジェの)総督府建物の歴史的なバルコニーに最後の姿を現した」。マイクロフォンの故障で彼らは言葉を発する機会もなく、「シナ人の影絵のように、将軍たちは姿を消した。これが最後だった」。ピエ・ノワール(pied-noir:アルジェリア生まれのフランス人。作家アルベール・カミュ、エドモン・ジョー将軍など)の老婦人は「すすり泣いた」(ホーン四八五頁)。

四月二六日(水曜日)、朝一〇時、シャル

将軍はただ一人、「パリへ、牢獄へ」と彼を乗せていく飛行機に向かった。他の三人の将軍たちは「別的手段による闘い」(後述:本論文3-3を参照)を継続するため、地下に潜伏した(ホーン四八五頁)。

四月二七日(木曜日)、第一外人空挺連隊の千二百人は、ゼラルダの基地から退去するに際して、兵舎をダイナマイトで爆破し、残っていた弾薬を全て空中に向けて発射した。輸送車両に乗せられて移動する時、彼らは「腹のそこから声を絞り出すように、もの悲しく、しかし思い切りのよいエディット・ピアフ(Édith Piaf、一九一五～一九六三/一〇癌で没)の「私はもう悲しまない」(一九六〇)を唄った。沿道を埋めて兵士らを見送るピエ・ノワールは、絶望してすすり泣いた」(ホーン四八六頁。The Expendables。ピアフの歌は日本では「水に流して」)。

3. victoire du transistor

3. 1 フォーサイス『ジャッカルの日』に見られる「分析」

フレデリック・フォーサイス(一九三八～)は、ドゴール暗殺を狙った『ジャッカルの日』の中で、この「将軍たちの一揆」について、次のように言及している。なお下記傍線部〔 〕内は、フォーサイスの原文および引用者(三石)による篠原邦訳文の修正部分である。

蜂起は失敗に終わった。単純でいやになるほど巧妙なドゴールの動きによって蜂起は事実上、緒につく前に潰されていたのである〔It failed. In one simple, depressingly clever move de Gaulle foiled the putsch before it could get off the ground. 一揆は失敗した。単純かつ巧妙を極める<一手one move>で、ドゴールは一揆が発動されそうと見るや先手を打って、一揆を出し抜いたのである〕。FLN との話し合いが始まるという声明が発表される数週間前、数千台のトランジスター・ラジオが各部隊に支給されたとき、将校は誰一人とし

て特別の注意を向けなかった。ラジオは兵士たちによって無害な慰めだというわけで、将校や上級下士官の多くはむしろ喜んでその支給を認めた。フランスから流されてくるポップ・ミュージックは、熱暑とハエと退屈に悩まされている兵士たちにとって、楽しい気晴らしになった。が、ドゴールの声は、ジャズほど無害ではなかった〔邦訳三七頁、原文二四頁〕。

この「サスペンスの王者」フォーサイスの解き明かす「ドゴールの打った〈一手〉」とは、一体どのような「〈手〉(チェスの指し手をmoveという)」であったのか。ところで曖昧殿下ドゴールは、すでに指摘したように、一九六一年一月八日の国民投票で白紙委任された結果、遂に考えを変えアルジェリアの独立に踏み切り、同年三月一五日フランス正統政府は民族解放戦線FLNとの会談を決定する〔ベルヴィエー八頁〕。

フォーサイスの「Anatomy of a plot」によれば、ドゴールの打った「手 move」すなわち戦略は私見によれば、三つの戦術からなる。第一の戦術は、会談を決定する三月一五日の「数週間前」、恐らく二月の下旬頃であろうか、アルジェリア駐在の徴集兵たちに「娯楽用」として「数千台」のトランジスター・ラジオを支給したことである。アルジェリア駐在の総兵力五〇万¹⁶⁾として、たとえば、もし一万台が支給されたとすれば、五〇人程の小隊に一台のトランジスターが、その半分の五千台とすれば、百人程の中隊に一台支給されたことになる。この最新の情報伝達機器の使用法が、単なる「娯楽用」ではなかったことが、やがて明らかになる。

すなわちドゴールが満を持して打った第二の戦術が、四月二三日(日曜日)夜八時からのテレビ放映とトランジスターラジオ放送である。この最新の情報伝達機器は、特にこのアルジェリアで、特に兵士や将校たちに、絶大な影響力を振った。ドゴール大統領は正統政

府のトップとして、テレビとトランジスターを通じて力強く断固として、とりわけ上下の軍律の厳しい軍隊内において、兵士たちに向かって、反乱軍の上官の命令に従うな、反乱軍の上官に反逆せよと命じたのである。兵士たちは不服従・非協力の「道義的」正統的根柢を得た。動揺分子は最早迷うことなく正統政府に従う道を選んだ。佐藤啓貴『シャルル・ドゴール』〔慶応義塾大学出版会二〇一三、一八九頁〕は、「ドゴール政治特有の技法として①国民投票、②TV演説があげられる。特にTVでの効果をフルに活用し始めたのはフランスではドゴールを嚆矢とする」と指摘している。在アルジェリアの兵士たちはこの演説を、トランジスター・ラジオを通じて聞き取って、即行動に移ったのである。

さらに留意すべきは、この放映・放送を通じてドゴールは、確かに「*tous les moyens*あらゆる手段」を尽くして、と繰り返したが、「今から直ちに、反乱は、一時間毎にますます激しくなっていく受動的抵抗(*passive resistance*)に直面しよう」と予言した〔シャープ二〇一六、二五頁〕ように、武器を持たない、果敢にして「積極的」な「受動的抵抗」が、「野火(燎原の火)のように広まった」〔ホーン四八四頁〕のである。一般国民で兵役期間二年半の徴集兵士たちは、兵器を取るのではなく、その場で即席に知恵を絞って、これまで多数・多彩な具体的事例を挙げてきたように、非協力・軍規の無視・作業遅滞・反乱軍からの離脱、等々果敢な受動的抵抗を敢行したのである。この「受動的抵抗」作戦が、ドゴールの打った第三の戦術である。つまりドゴールは「あらゆる手段を尽くして」抗命せよと命じたが、兵器を取っての「反クーデタの内戦」を命じたのではなかった。これを察知して、兵士・下士官らは、すでに見たように、自分たちの職掌の範囲内で、自発的に、あらゆる形態での「積極的」な「受動的抵抗」を敢行し、徹底的にクーデタを無力化して、シャル将軍をして早

くも四月二五日(火曜日)の朝には、「事はすべて敗れた」と観念させてしまったのである。

3. 2 国家防衛の戦略：ドゴールの勝因、将軍達の誤算

将軍達の反乱については、ドゴールの国防戦略の巧妙さと一揆側の誤算と言う両面から見ておく必要がある。まず「ドゴール国防戦略」の効果について、すでに日を追って多くの具体例を示してきたが、さらにホーンの挙げる「効果・事例」を示せば〔ホーン四八三頁以下〕、

①「大統領の断乎とした国家への服従と忠誠の訴え」は、「フランス軍の歴史上初めて、国家元首が、反乱した軍の上官の頭ごしに、直接軍隊に訴えた」ものであった。

②下士官・兵の多くは「一揆」について「何も聞かされて」おらず「無関心だった」が、「あらゆる手段を用いて反乱軍を阻止せよ」というドゴールの「明快な命令」は反乱軍への抵抗の「道義的な支えとなった」。兵士たちは、「上官に服従しなければならぬという軍紀上の要請すべてから解放」された。

③その上官たちもまた、ドゴールの「明快な命令」に、「それまで動揺を続けていた」態度決定に、絶好の「口実」を与えた。

④「女も、勲章も、名声も、みんな独り占めにし、傲慢なエリート主義まるだしで、〈一般〉連隊を見下す傾向があった」空挺部隊に反感を抱いている兵士も多かった。

⑤「アルジェリア全土で、軍兵舎の壁や屋根に〈下士官・兵を頼りにするな！〉という警告のスローガンがなぐり書きされた」。このスローガンの意味は、上記②に示したように、下士官・兵士たちが「上官の命令に従わない」ということを宣言するものである。

⑥信号部隊は、反乱軍相互間の通信文の伝達を拒否した。コンスタンチヌでは武器倉庫が占拠された。反乱加担の連隊では、連隊長の指揮所に手投げ弾が投げ込まれた。

⑦ホーンは挙げていないが、アルジェリア現

地の政府諸機関は、ドゴールの命令に従って意図的な怠業や離反を敢行し、反乱者たちの統治能力を著しく無力化したことである。

他方また、「一揆側」の「どうしようもない」誤算について、ホーンが簡潔にまとめている〔四八七頁〕。すなわち、

①一揆の計画が余りにも性急であった。〔決起までに「わずか八日を残すのみであった」。クーデターは「秘密と迅速」が要請されるが故に「計画が軽率となる」危険を常にはらんでいることである〔ホーン四六六～四六九頁〕〕。

②一揆の指導者たちは、自分の将来に期待を抱いている現役士官たちに及ぼしうる影響力を余りにも過大視していた。〔一人を除きすべての地区司令官が参加を申し出なかった〔ホーン四七〇頁〕。空軍と陸軍〔ホーン四八三頁〕、海軍の離反〔ホーン四七七頁〕が致命的であった〕。

③一揆の計画をピエ・ノワールの「過激派」と調整しようとしなかった。〔一揆を支援するコロントたちとの大衆的連繫戦略を欠いていたという指摘である〕。

④一貫した長期戦略がなかった。〔シャル自身は明確な長期計画を持っていたが、「軍事行動完了」直後の詰めが未解決であった〔ホーン四七〇頁〕〕。

⑤国外から得られる応援や、フランス本国の一般市民の気分についての誤算があった。

⑥アルジェリア駐留軍の下士官・兵が〔当然予想されはずの大統領ドゴールの反クーデター戦略に〕どんな反応をするかを考慮していなかった。

⑦反乱軍の将軍たちは、新しい情報伝達機器の影響力を認識できず、「フランスからの放送を妨害しなかった」〔ホーン四八三頁〕。ドゴールが、現地の軍指揮官の頭越しに直接、下士官・兵に断乎として正統政府への服従を命じることが可能であったことが、すなわち「トランジスターの勝利」をもたらしたのである。

少数の犠牲者が出た。アルジェリアとパリで、恐らく三人が殺され、数人が負傷した。クーデターは、公然たる拒否と自己解体で徹底的に打ち破られた〔シャープ二〇一六、二七頁〕。

3.3 アルジェリア、その後

将軍たちの反乱の後、一九六一年五月一日から交渉が開始されるが、連合不可、サハラの帰属、コロンの特権剥奪などの難問が山積し、交渉は難航を極めた。この間一九六一年秋から六二年冬にかけてOASによる狂気のテロ、アラブ人狩りが荒れ狂い、それはフランス人将校や警官、はては本国の裁判官などの暗殺にまで広がって、フランスの世論は即時和平を要求した。フランス側、アルジェリア側の大臣たちも立ち会い、遂に一九六二年三月一日、第二回エヴィアン会議で「協定」に調印、停戦が成立した〔アージュロン一四七頁〕。

調印停戦と共に、アルジェリアではOASによる最後の悲劇的なテロリズムが荒れ狂い、アルジェリア人の大量虐殺、はてはフランス憲兵隊への襲撃にまで拡大する。一九六二年四月八日「エヴィアン協定」の是非を問う国民投票が行われ有効投票の九〇・七％がアルジェリアの独立に賛成した。六月一七日にはFLNは、破壊活動の停止と引き換えに特赦を約束したが、コロンたちはパニック状態のまま「祖国」からの大量流出となった。同年七月一日、民族自決の国民投票によってアルジェリア人は「ノン」一万六千人、「ウイ」五九七万五千人で独立を選んだ。「一三二年間のフランス支配の後、アルジェリアは独立アラブ国家となった」〔アージュロン一四九～一五二頁〕。一九六二年七月三日フランスは独立を承認し、アルジェリアは正式に独立した〔独立後もアルジェリア民主人民共和国の苦難の道は続く（外務省HP）〕。

注

- 1) 仏領アルジェリアの歴史については、私市正年編著『アルジェリアを知るための62章』明石書店二〇〇九、第四章（渡邊祥子）、以下「私市〇〇頁」と表記。シャルル＝ロベール・アージュロン『アルジェリア近現代史』私市

正年・中島節子訳、文庫クセジュ二〇〇二、第一～三部、以下「アージュロン〇〇頁」と表記。ギー・ベルヴィエ『アルジェリア戦争』渡邊祥子訳、文庫クセジュ二〇一〇、第一章、以下「ベルヴィエ〇〇頁」と表記。アリストア・ホーン『サハラの砂、オーレスの石、アルジェリア独立革命史』北村美都穂訳、第三書館一九九四、第一部、以下「ホーン〇〇頁」と表記。『岩波 イスラーム辞典』（二〇〇九）の「アルジェリア」「アルジェリア独立戦争」「民族解放戦線」等の関連項目も参照。なおフランス外人部隊は一八三一年三月（七月王制）に、第一外人空挺大隊は一九四八年に、設置されている（ただし一九五五年に連隊となり、六一年には解隊された）。

- 2) 私市九七～九八頁。アージュロン三八～三九頁および六八頁。
- 3) 私市一〇七～一一五頁。ベルヴィエ二六～三四頁。なおアミール *amir* は指導者の意の称号（*Khalid ibn Hashimi* で検索）。ハーτζュ *hajj* は大巡礼完遂者の尊称。メサーリー、イブン・バーディーズ、「北アフリカの星」、*amir*、*hajj*、人名の各項は『岩波 イスラーム辞典』参照。また *Badrane Benlahcene*, “The Socio-Intellectual Foundations of Mark Bennabi’s Approach to Civilization”, *The International Institute of Islamic Thought, London/Washington*, 2011, p.162参照。なお「アラブ人名の由来と正しい呼び方」（ジェットロ、リヤド事務所編、二〇一六・八・一閲覧）等によれば、姓がなく「本人名+父名」が基本であるから、安倍晋三の場合は「晋三、晋太郎の息子」となる。
- 4) ベルヴィエ五六～八六頁に第四共和の主要内閣のアルジェリア政策がやや詳しく迎られている。また塚本俊之「フランス一九五八年憲法制定過程の研究（1）『香川法学』二〇一一、三一（一・二）号、および、同（2）『香川法学』二〇一二、三一（三・四）号。塚本（1）の八～一一頁にはドゴール登場まで

- の第四共和の政治過程が活写されている。
- 5) 深瀬忠一「フランス第五共和国憲法の多角的・総合的検討について」『北大法学論集』三六(五・六)一九八六、二九八～三〇〇頁。
 - 6) ドゴール (Charles de Gaulle 一八九〇・一・二二～一九七〇・一・九、動脈瘤破裂で急逝)、在任一九五九・一・八～六九・四・二八。ミッシェル・ドブレ Michel Debré (一九一二～九六)、在任一九五九・一・八～六二・四・一四。
 - 7) 『ジャッカルの日』(篠原慎訳、角川文庫、一九九一年二四版)三七～三八頁。フォーサイスの文は「虚実混交」であるが、ラジオ配布は「実」である(ホーン写真三三)。Frederick Forsyth, *The Day of the Jackal*, NAL, 2010, p.24.
 - 8) ホーン四六六頁など。アンドレ・ゼレール Zeller はブザンソン生まれ、姓はドイツ系である(→ *Patronyme alsacien*)。
 - 9) アレクザンダー・ワース『ドゴール』内山敏訳、紀伊国屋書店一九六七、二〇九頁、以下「ワース〇〇頁」と表記。
 - 10) ホーン四八〇頁は「二二日夕刻」とするが、*Principal Dates and Time Line of Algeria 1961-1962* (marxists.org/history/Algeria, retrieved 26/08/2015) は「四月二一・二二日」とする。今この説に従う。以下これを TLOA と略称する。
 - 11) *The Expendables*, by William Langewiesche, December 2012, vanityfair.com, retrieved 30/06/2016.
 - 12) ジーン・シャープ『市民力による防衛 軍事力に頼らない社会へ』三石訳、法政大学出版局二〇一六、二四頁。以下「シャープ二〇一六、二四頁」のように表記する。なおクレパン将軍はドゴールへの無条件忠誠派(ホーン四〇一頁)であるが軍事的にはアルジェリア軍寄りという(同前四四四頁)。
 - 13) 三〇トン級中戦車、三八・六 km/h、主砲七五 mm、五人乗り、米産、Sherman。
 - 14) [nvdatabase.swarthmore.edu/french-citizens-and-soldiers-nonviolently defend against Algerian putsch,1961](http://nvdatabase.swarthmore.edu/french-citizens-and-soldiers-nonviolently-defend-against-Algerian-putsch,1961). Retrieved July 2, 2016. 以下スワースモアと略称する。
 - 15) *France's Nuclear Weapons-Origin of the Force de Frappe*. nuclearweaponarchive.org, retrieved July 2, 2016.
 - 16) シャープ二〇一六、二四頁による。但しベルヴィエ六八～六九頁によれば、一九五六年一月の時点で二〇万人、この中には外人空挺連隊のような職業的な歴戦の勇士が含まれよう。アルジェリアの情勢の悪化を見て、一九五六年七月には四〇万人に、五七年一月には四五万人となった。この新たに強制急募された兵士たちは普通の国民・市民であって、徴兵期間三〇カ月、全アルジェリアに配備された。一九六一年二月時点でも徴集兵数は変わらないとすれば、五万人程が尉・佐・将の士官となろう。